大阪インターナショナルチャーチ　　アリステア・マッケナ師　　2017/1/22
黙示録 7 章「激しい怒りのうちにも、あわれみを忘れないでください。」

7:1 この後、私は見た。四人の御使いが地の四隅に立って、地の四方の風を堅く押さえ、地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにしていた。 7:2 また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神の印を持って、日の出るほうから上って来た。彼は、地をも海をもそこなう権威を与えられた四人の御使いたちに、大声で叫んで言った。
7:3 「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」 7:4 それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、十四万四千人であった。 7:5 ユダの部族で印を押された者が一万二千人、ルベンの部族で一万二千人、ガドの部族で一万二千人、 7:6 アセルの部族で一万二千人、ナフタリの部族で一万二千人、マナセの部族で一万二千人、 7:7 シメオンの部族で一万二千人、レビの部族で一万二千人、イッサカルの部族で一万二千人、 7:8 ゼブルンの部族で一万二千人、ヨセフの部族で一万二千人、ベニヤミンの部族で一万二千人、印を押された者がいた。 7:9 その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立っていた。 7:10 彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」 7:11 御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物との回りに立っていたが、彼らも御座の前にひれ伏し、神を拝して、 7:12 言った。「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの神にあるように。アーメン。」 7:13 長老のひとりが私に話しかけて、「白い衣を着ているこの人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか」と言った。
7:14 そこで、私は、「主よ。あなたこそ、ご存じです」と言った。すると、彼は私にこう言った。「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。 7:15 だから彼らは神の御座の前にいて、聖所で昼も夜も、神に仕えているのです。そして、御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるのです。 7:16 彼らはもはや、飢えることもなく、渇くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。 7:17 なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。」

<u>導入</u>
この 7 章の学びにタイトルを付けるとするなら、「激しい怒りのうちにも、あわれみを忘れないでください。」というハバクク 3 章 2 節のみことばを引用するでしょう。

というのも、7 章では神が一旦休止しておられるからです。
6 章で注がれた御怒りを一旦休止して、ここでいくつかの良き知らせを与えてくださいます。この後 8-20 章では裁きが下される様子が記されています。
第 6 の封印と第 7 の封印の間には小休止があるわけです。
この小休止の間に、神は大いなる御怒りから救い出される二種類の人々について語られます。

それは、神の印を押された 14 万 4000 人のユダヤ人と、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほど多くの異邦人の群衆です。
この人々は「大患難」の間に登場すると記されています。

ここで、「大患難」をおおまかに把握しておくことが大切です。
6 章で神の御怒りが注がれ始めます。その後、教会の「携挙」が起こります。
これはどういう意味でしょう。
ではここで、テサロニケ第一 4：14-18 を読みましょう。

4:14 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。 4:15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。 4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、

ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、 4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。 4:18 こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

ここで「引き上げる」と訳されたギリシャ語の単語は「ハルパゾー」で、これは捕らえる、無理やり連れて行く、奪い取るという意味です。
ですから、未来のいつかの時点ですべてのクリスチャンはイエスのみもとに行くために地上から有無を言わさず連れて行かれるのです。
このことが起こってから、神を信じようとしない世の中に神の御怒りが注がれます。
この出来事について書かれた他の個所もたくさんあります。その代表的なものをここに挙げておきます。

（黙示録 3：10、マタイ 24：30-31、ダニエル書 12：1-2、ルカ 17：34-37）

教会が天国に引き上げられた後、6 章から始まる神の御怒りが注がれるようになります。
その期間を「大患難時代」と呼びます。（14 節）

今朝の学びでは、患難の期間中にユダヤ人たちが神の器となること、そして多くの異邦人たちが救われること、また多くの人々が信仰のために殺されてしまうことがわかります。

この 2 種類の人々について学ぶ前に、7 章 1-3 節に注目してください。
ヨハネは四人の御使いが地の四隅に立っているのを見たと語ります。
これらの御使いたちには、14 万 4000 人のユダヤ人たちが神の印を押されるまで地上のすべての出来事を押さえる力がありました。
このことから、14 万 4000 人のユダヤ人たちが神の印を押されることの重要性が伺えます。

1. 印を押されたユダヤ人（1-8 節）

ヨハネは、先の 4 人の他にもうひとりの御使いを見ました。この御使いは生ける神の印を持っていました。
ここで「印」と訳されたギリシャ語の単語は、通常「印形のついた指輪」を指すのに使われる単語です。
国王などが重要文書を封緘する際、こういった指輪とろうを使いました。
こうして封緘されていることで、書の出所をはっきりさせ、記された内容を確実に守りました。
創世記 41：42 で、パロは自分の印形のついた指輪をヨセフの指にはめました。これは、権威を彼に授けた象徴です。
ですから、印は所有と守りのしるしでした。
（ヨハネ 6：27、コリント第二 1：22）

地上の支配者が押す印と違って、御使いの持っていた印は生ける神の印でした。
ここで、すばらしいことが起こっています。
神は、大患難時代の期間中にユダヤ人 14 万 4000 人を守ることを保証しておられます。
史上最悪の時代にどんなことが起こったとしても、神はご自身の選ばれた 14 万 4000 人のユダヤ人を守られるのです。
そんなことがおできになる権威をお持ちなのは神ご自身のみです。
旧約聖書で、死の使いがエジプトの第一子をすべて殺したとき、神はイスラエルの民を守るために門柱とかもいに血を塗ってしるしをつけられました。
また、エリコの人々が殺されたときに、神は赤いひもでラハブにしるしをつけて守られました。
しかし、この個所ともっとも類似した描写はエゼキエル 9：3-6 に登場します。

エゼキエル 9：3-6
9:3 そのとき、ケルブの上にあったイスラエルの神の栄光が、ケルブから立ち上り、神殿の敷居へ向かった。それから、腰に書記の筆入れをつけ、亜麻布の衣を着ている者を呼び寄せて、 9:4 【主】は彼にこう仰せられた。「町の中、エルサレムの中を行き巡り、この町で行われているすべての忌みきらうべき

ことのために嘆き、悲しんでいる人々の額にしるしをつけよ。」 9:5 また、私が聞いていると、ほかの者たちに、こう仰せられた。「彼のあとについて町の中を行き巡って、打ち殺せ。惜しんではならない、あわれんではならない。 9:6 年寄りも、若い男も、若い女も、子どもも、女たちも殺して滅ぼせ。しかし、あのしるしのついた者にはだれにも近づいてはならない。まずわたしの聖所から始めよ。」そこで、彼らは神殿の前にいた老人たちから始めた。

同じような方法で神のしもべには神のしるしが付けられ、来たる裁きの中、守られるのです。
（黙示録 9：4 は、彼らの額に神の印が押されていたと語ります。）

では、印を押された 14 万 4000 人のユダヤ人とは誰でしょう。
信ぴょう性のある答えを導き出すため、聖書個所のみを用いたいと思います。

14 万 4000 人の人々が登場する聖書個所は、他にひとつしかありません。
では、黙示録 14：1-5 を読みましょう。

黙示録 14：1-5
14:1 また私は見た。見よ。小羊がシオンの山の上に立っていた。また小羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とがしるしてあった。 14:2 私は天からの声を聞いた。大水の音のようで、また、激しい雷鳴のようであった。また、私の聞いたその声は、立琴をひく人々が立琴をかき鳴らしている音のようでもあった。 14:3 彼らは、御座の前と、四つの生き物および長老たちの前とで、新しい歌を歌った。しかし地上から贖われた十四万四千人のほかには、だれもこの歌を学ぶことができなかった。 14:4 彼らは女によって汚されたことのない人々である。彼らは童貞なのである。彼らは、小羊が行く所には、どこにでもついて行く。彼らは、神および小羊にささげられる初穂として、人々の中から贖われたのである。 14:5 彼らの口には偽りがなかった。彼らは傷のない者である。

この個所から、14 万 4000 人について次のようなことがわかります。
1　これらの人々は、「小羊」といつもつながっていて、「小羊」が行くところどこにでもついていきます。「小羊」はイエスです。（1,4 節）
2　14 万 4000 人は全員童貞でした。（4 節）
3　14 万 4000 人は、神と「小羊」にささげられる「初穂」です。
4　14 万 4000 人は傷のない者で、その口には偽りがありませんでした。
他の聖書個所を見る前に、もうひとつ必要な情報があります。
それは、7 章 4 節に記されています。
4 節には、14 万 4000 人がイスラエルの「子孫」のあらゆる部族の出身であると記されています。
この情報をもとに、14 万 4000 人の正体を知らせるヒントとなるような関連性が、ここに挙げられた事柄と他の聖書個所とにあるかどうか考えなくてはなりません。

では、コリント第一 15：20 を読みましょう。

Ⅰコリント 15:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。

イエス・キリストの復活は「初穂」と表現されています。
早くも、イエスの復活と 14 万 4000 人の関連が現れました。
このふたつはいずれも「初穂」と記されています。
神が 14 万 4000 人のユダヤ人を死から復活させられるということでしょうか。
もちろんそれは可能ですが、その人たちは皆、童貞で傷もなく、口に偽りのない者でなければなりません。では神は、そのような条件を満たすユダヤ人の子孫を 14 万 4000 人もどこから探してこられるのでしょう。ここで、イザヤ書 53：8 を読みましょう。

イザヤ 53:8 しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。

イザヤ書 53 章がイエスの死を預言していることは明らかです。
イザヤは「彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。」と問いかけます。

さて、イエスが 2 歳だったころ、ヘロデ王は 2 歳以下の子どもたちをすべて殺させました。
その個所を読みましょう。

マタイ 2：13-16
2:13 彼らが帰って行ったとき、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。「立って、幼子とその母を連れ、エジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています。」 2:14 そこで、ヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、 2:15 ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは、主が預言者を通して、「わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した」と言われた事が成就するためであった。 2:16 その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである。

ここで殺された子どもたちはベツレヘムとその周辺地域全域の子たちでした。
新改訳では「ベツレヘムとその近辺」とあります。
ですから、すべてのイスラエルの部族の男の子たちが殺された可能性もあります。
ヘロデは、イスラエルの部族全体でユダヤ人の男の子がひとりも生き残らないようにしたでしょう。
次に注目するのは、マタイがこの殺りくをエレミヤ書のみことばに関連付けたことです。
では、エレミヤ 31：15 を読みましょう。

エレミヤ 31:15 【主】はこう仰せられる。「聞け。ラマで聞こえる。苦しみの嘆きと泣き声が。ラケルがその子らのために泣いている。慰められることを拒んで。子らがいなくなったので、その子らのために泣いている。」

次に、16-17 節で神は次のように語られます。

31:16 【主】はこう仰せられる。「あなたの泣く声をとどめ、目の涙をとどめよ。あなたの労苦には報いがあるからだ。――【主】の御告げ――彼らは敵の国から帰って来る。 31:17 あなたの将来には望みがある。――【主】の御告げ――あなたの子らは自分の国に帰って来る。

神は、殺された子どもたちがいつの日か故郷のイスラエルに帰って来ると約束しておられます。
これは、神の驚くべき約束です。神の驚くべき約束が、この個所に殺された子どもたちという内容で記されているのです。

殺された子どもたちについて分かっているのは、彼らがすべて童貞であることです。2 歳以下ですから、黙示録 7 章と 14 章に記されている 14 万 4000 人の条件にすべて合致するはずです。
これらの殺されたユダヤ人の子どもたちが、大患難時代にイエス・キリストを伝道するために死から復活させられるということでしょうか。

神に不可能はありません。ですから、それが神のみこころならそうなさるでしょう。
神はエレミヤ 31 章で、いつの日か殺された子どもたちを自分の国に帰らせると約束しておられます。
ですから私たちは、いつか必ず神がそうしてくださると確信できます。
それが、大患難時代にイエスのために働くというすばらしい務めを果たすためであっても不思議はありません。
これは、黙示録の学びにおいて新たな考えかもしれませんが、ここで皆さんにご紹介した内容はすべて聖書に記されている事柄です。

エホバの証人は、彼らが 14 万 4000 人の一部であると考えます。しかし、明らかにそうではないと言うことができます。

おもに覚えておくべきことは、大患難時代には、イエスは14万4000人のユダヤ人をとおして働かれるということです。彼らは、史上最悪の時代に神の働きをなすために、神によって完全に守られます。
それは、今日もメッセージのタイトルが示すとおり、神が激しい怒りのうちにもあわれみを忘れないお方だからです。

2. あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから出た群衆（9-17節）

次に、9-17節に登場する、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから出た群衆について考えましょう。
その答えは14節に記されています。
彼らは大患難をとおってきた人たちで、その衣を小羊の血で洗って白くしました。
ここで考えなければなりません。
彼らは、小羊の血で洗われてきよくなったとあります。
新約聖書には、「小羊の血」について記された個所が多くあります。
最初に、小羊とはイエス・キリストのことです。
私たちにとって血は死を示しますから、小羊の血とはイエス・キリストの死を指します。
しかし、ユダヤ人にとって血は命の象徴でした。
ユダヤ人は、血の入った物を飲んだり食べたりしてはいけないと神に命じられていました。
それはなぜでしょう。
それは、血に命があり、命は神のものだからです。
ですから、新約聖書がイエス・キリストの血について語るとき、イエスの死を意味するだけでなく、イエスのいのちも意味するのです。
イエス・キリストの血とは、イエスがその人生と死においてなされたすべての事柄を指します。
これを念頭に、新約聖書がイエスの血について何と語っているか見ていきましょう。

1. イエスの血はすべての罪から私たちをきよめる。（ヨハネ第一1：7）

2. イエスの血は、聖なる神の御前に私たちを「義と認める」。まるで私たちが一度も罪を犯したことがないように見なされるのです。義認とは、神の御子イエス・キリストの流された血に免じて、聖なる神が罪深い人類を赦されることです。（ローマ5：9）

3. イエス・キリストの血は私たちを「贖う」。これは、神の御怒りや罪の罰、そして罪の束縛から私たちを買い戻すために代価が支払われるという意味です。（エペソ1：7、ペテロ第一1：19）
4. イエス・キリストの血は、自らの死に直面するときに心に平安を与えてくれる。また、神の御前で平安をもって人生を生きることができる。（コロサイ1：20）
5. イエス・キリストの血は、私たちの良心をきよめてくれる。（ヘブル9：14）
   イエス・キリストの血をとおして赦された昔の罪について、罪悪感を持つ必要はなくなります。

イエス・キリストの偉大な御業とは、神と人との間の失われた関係を回復することです。ここに挙げたすべてのものを私たちが受けるためには、イエスがご自身のいのちを捨てなければなりませんでした。
私たちの救い主イエスはなんとすばらしいお方でしょう。
あなたは、イエスを自分自身の救い主として受け入れていますか。
このお方を心から愛していますか。
そして主に従順に従っていますか。
もしそうなら、今の人生においても永遠においても、イエスの血が成就してくれるはずの事柄があなたのものとなるでしょう。

次に、小羊の血で衣を洗った人たちの務めは何でしょう。

a) 奉仕

15 節には、彼らの務めが日夜神に仕えることだと記されています。
彼らは常に神に仕えるために整えられています。それは、小羊の血によって洗った白い衣を着ているからです。
イエスのおかげで、きよい聖なる者となったのです。
日夜神に仕えるのは、レビ人や祭司の任務でした。（歴代誌第一 9：33）
初期の幕屋や神殿では、ユダヤ人のレビ族の祭司に限定されていましたが、天国の神殿では、すべての国々の人々が選ばれています。
小羊の血で洗われた人は誰でもイエスに仕えることができるのです。
イエスに仕えることが、この地上でも天国でも私たちの務めです。

クリスチャンの方にお尋ねします。あなたはこの地上でどのようにイエスに仕えていますか。

b) 守りと満足

神が彼らの間に住まわれ、彼らの面倒を見てくださいます。
神はすべての必要を満たされるので、彼らが飢えたり渇いたりすることはありません。また、涙も危険もありません。神が彼らを導く羊飼いだからです。
16-17 節に、天国が短く紹介されています。
天国とは、完全な充足と満足の世界です。
イエスは地上を歩まれたとき、多くの約束をなさいました。
イエスは、「義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。」とおっしゃいました。（マタイ 5：6）
また、「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない。」ともおっしゃいました。（ヨハネ 6：35）
そして、「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがない」とおっしゃいました。（ヨハネ 4：14）

天国に行けば、これらの約束はすべて真実だったとわかるでしょう。けれども、この世でも部分的に成就することはあります。

アウグスティヌスは言いました。
「私たちの心は、イエスのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです。」

あなたの心は安らぎを得られない状態でしょうか。

イエスのうちに憩いを得てください。そうすれば、イエスの約束がすべて真実であるとわかるでしょう。
古くからある英語の賛美に次のような歌詞があります。

キリストよ、私のたましいは
あなたのうちに見つけました
求め続けた平安と喜びを
今まで知らなかったこの上ない幸せを

キリストの他に、満たしてくれるものはない
御名の他にはない
愛といのちと尽きない喜びを
主イエスよ、あなたのうちに見つけました

今、満たされないと感じているなら、イエスとまだ出会っていないか、イエスから離れてしまっているかのどちらかでしょう。

イエスを求めて、イエスのもとに戻り、イエスを楽しみましょう。それが今日、あなたに与えられた選択肢です。